

豆腐につきて

私共の食物

家一、二

養一

貝原益軒の女子教育

裁縫に關する所感

技三

技四

美術上に現はたる月

技四

お茶につきて

技三

會報

第三十三回學術談話會技藝科部會記事

本年度役員變動

本年度新入會員

會費領收會計報告

鎌原上中黒山佐大藤本春山松藤水望杉河金向	用田岡田	井日	井木	田野	本月	若松	子田
あちよ	島	方	間	民	ふつ	き	子田
あちよ	ち	の	さ	い	つ	若	子田
あちよ	あ	み	さ	い	つ	若	子田
あちよ	あ	み	さ	い	つ	若	子田
あちよ	あ	み	さ	い	つ	若	子田
あちよ	あ	み	さ	い	つ	若	子田
あちよ	あ	み	さ	い	つ	若	子田
あちよ	あ	み	さ	い	つ	若	子田
あちよ	あ	み	さ	い	つ	若	子田

學術談話會技藝科部會報 第拾號

姉崎博士の御話

前からこゝにきてお話し申上る筈であつたがよほど延びて利息をつけてあげなければなりません
 がその利息もまけて頂いてその元金もまけて頂いて下田君の借金返しをするわけである時間もお
 くれましたが技藝科といふことですから日本美術に付て申上る筈でしたが今晚通俗講話で瀧君が
 幻燈を以つて話されるからこゝで私が口で話する必要がないから今日は平家物語りについてお
 話しをいたしませうそれといふのは近頃平家物語の註釋が澤山でゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 と讀まれてゐる。

私がこれについてこんな希望をもつて見て頂きたいといふことを申上たいとおもひますしかし人
 によつてその見方がちがふから私の申す讀み方が完全とは云はないがこゝにいふ意味に於て讀んで
 頂きたいと望むのであります。

平家物語りは御存じの通り單に源平の戦争の話のだがそれのみならず其時代の情緒が強く深く現
 れてゐる平家方の人物が各々特色をもつて現れてゐるしかも同じ運命をもつて現れてゐるその點
 を除けば源平盛衰記と變りはない近年平家物語の出版物の内容は宗教の話し悲哀のものがあるが
 これをぬきにしたものを出すといふことは時代に合はないからであるそれならば平家物語でなく

て其特色はかなしいかも知れぬ或は佛くさいかも知れないがその宗教的情緒が根本になり時代の變化が伴つて平家の主としての特色がある保元平治の物語りにも現れてゐるがそれは微弱であるそれならば其時代を支配した全體の潮流はどんなものであつたかこれはもう歴史で御存じの通りである平安四百年の歴史は日本歴史の内のこまやかな濃厚な春の様な一つの歴史である勿論其中には陰謀もあるが詩的情操を發揮したる夢の如きものがある音楽でも宗教でも凡ての方面に現れ立派な御殿の人々が像を真中に据えて天井には天人が飛んでゐる壁には壁畫が畫かれてゐるそれにも尙あき足らず前では鐘をならし香をたき花をかざるといふように濃厚でなくては満足しないそれと同様に宮廷の生活も濃厚であつたその四百年の夢は終に破られるべき夢であつた實際四百年續いたのは全く不思議であるしかし實際かゝる夢の續いたのは二百年でごくつゞめると百年位になる道長前後を通じて百年といふてよいそれより花咲く都もたちまち兵陣の巷となつたが百年の夢はよく續いたものだそこでこゝに變化が起つたこれは源平二氏が力を貯へて都に上り終に保元平治に爆發して花の都も夢となり西國の片田舎の武士とさげすんだ武士が政治をとり清盛は大政大臣となるこの變化は實に大なるものである奈良朝六百年の王朝の政治組織が破れかくて北方より出た武人が力を占め政治をとることゝなつたこれは社會上大變化であつたが平家は武人にしてこの新時代をつくり出した其文學宗教等の全體の情緒についてはよほど藤原氏にかぶれてゐ

た平家といへば淨海入道を想像するしかし清盛は入道ではなくてやさしい顔の立派な男であつたその清盛が例へば嚴島神社に献じた阿彌陀三經の軸が残つてゐるがこれをみれば如何に優美で美術思想にたけてゐたかはこれを以つてわかる平家物語りの内でも平家の公達は優にやさしく戦の中に歌をよむことを忘れず詩を賦し陣中であつて月を見神前に於ては琵琶を弾ずといふように凡てこゝろいふ種類の生活であつたかく平家三十年の生活は政治上には變化をきたしたが情緒の方からは藤原氏の思想をうけた殿上をも許されなかつた平家が藤原氏の上に立つようになつたそれだけみても人々は驚かされたがこれがなしては平家の天下にして政事が永く行はれることゝおもつてゐたしかるに一方は太平の夢に酔ふてゐるかくの如くして起る變化は思ひがけない方面に下の方から地震が起る如く初めは雲の一片とおもふてゐたものがだん／＼集つて雷光がし終に非常な雷雨が起る様にかくて東國の方よりおそひ警戒をつたへ都は兵亂の巷となりみな灰燼となり平家は都の西に落ちて行つた京都を都と思ふてゐた西國の人の受けた感動は如何であつたか我々の想像以上であらう之は明治維新の際に徳川氏が城をあげ渡して薩長の人々が江戸に入り來りたる時の江戸の人々の感じよりも更に強くあつたであらうされど平家の人々には未だ望があつた又勢力を養つて都にかへるものと考へてゐた壽永元年に都を落ちる時は恰も尊氏が都をおちて九州にかへる時とその感は同じであつたであらうしかし尊氏は歸つたが平家はつひに壇の浦で全滅したか

くの如くして平家一門はやぶれたこの變化は社會上行政上の變化がきたそれに情緒の變化がきた東蝦夷といはれた所の關東武士から支配される様になつた平安朝以後都と云へば京都としか考へてゐなかつたその所に實は政治の中心がなくて關東に於て政をする様になつて東の方から今迄と違つて大臣參議納言の名はなくて急に武家の耳なれぬ名が世を支配するやうになつた。此の時代に於ける人心は云ふに及ばず此の社會組織に於ける變化につきての感動を代表して書きたるものは平家物語である此の點が第一着目すべき必要がある一々云へば煩はしきが故に此には略く、もう一つはかくの如き變化に伴ひ如何なる精神上の動搖信仰の動搖に變化があつたか平安朝の儀式佛敎は全廢となつた其の不意の用となつた先驅は空也上人であつた空也上人は貴族的佛敎を平民的の宗教として表はした其の大變化に對する宗教的印象を一層強く明らかに表はしたのは法然上人であつた復雜な宗教に於て全々打撃を起して實に簡單なる質素なる宗教であつた行儀作法を守らなくてもよい只々信心の一念にありたゞこれだけだ、此の新福音が法然上人のあの時代に對する感化は強く廣く及んだ、故に平家物語を讀むなら法然上人の人物を見る必要がある平家物語は名文として文章の巧あれども繪畫なし然るに法然上人の傳記には繪などがついてゐる此の二者が裏となり表となつてゐる。

かくの如き簡單なる教なりその改革は變化の世コンスターネーションの時代に對する大なる慰安の力であるかの平の重衡が捕はれて鎌倉に行き木津川に戻されて傷つきて死ぬ時南に南無阿彌陀佛をとなへて往生した徳川時代となりても芝居に娘の不行狀を怒つて殺さうとする時に娘覺悟あるかと云ひ南無阿彌陀佛と手を掌せて死ぬのもこの類である水に入る人も西の山に入る日をみて自分もあれに行くかと思ひこの信仰全體が宗教家の背景となつて居るとみればその内の情緒に深く人の慰安を與へる事を發見するだらう、而して念佛の宗教は悲觀的である之がよいか悪いかは疑問だがとにかくあの時代にはそれが必要であつた源氏は生存競争をやつて奮進したが慰安を要する人間は負けた方がコンスターネーションに居る人だ樂天と悲觀とを比べればそのよきか悪きかはその人の性によるかゝる悲哀は人間が活動しても之を許さずその人の事情と状態がかへねばならぬ、近頃巢鴨病院へ行ってみても幽鬱症の人はつとめて外へ出すと愈々幽鬱となる狂に松火の反對で却て悪くなるかくの如く當時は活動も進取も出來ないのは武士と云ふ階級があつて上より抑へて居たそして頭を揚げれば首をちよぎられる故とにかく全體の人の慰安は陰鬱を宜しとした、故に平家物語が之を代表して居る今の學校ではあやまつて厭世はいけない樂天はよろしいと云ふが之は別問題としてとにかく此の情緒全體が感通して一方には社會の驚くべき情緒の變化が表はれたると同時に運命を弄ばされた。

之れから一人一人の人物につきてあげる。

清盛は平家物語の主人公である淨海入道と云つた、入道と云へば今日ならばおぼけの様な大男の様に思ふがこの時代にはやさしい有難い良い人と云ふ意味があつた貴族が發心すれば生臭くても綺麗であつた今日大入道を聯想するのは清盛以來であつたけれども清盛は實際やさしい人であつた、それでは面白くないから清盛は入道をかへす位の人で横紙を破るほどの人で所謂意の人であつた智もあつたが政治家としても立派な人であつた、しかしながら平家物語に表はれたる入道は意志一方の人であつて情のなき人であつたとしてある、死ぬ時迄かゝる人間が肺病等では面白くないから盛んな熱病でしかも僅の水では仕方がないから比叡山から水道を引いて軀にかければシエーシュー云ふ位、死しても佛供養をするな頼朝の首を手向けよ、それでなければ入道が出るぞとにかく意志の合力で出來た人だとしてゐる、然し平家物語の入道にも優しい所がある様に書いてある、第一子煩悩であつた、又貴方がたの前で云ふのは如何はしいが女好きであつた、其の方面より清盛の運命に對する暗示があつた、一つは常盤の事、頼朝牛若三人を無いものとすれば平家の壽命はもつと長かつたであらうが其の三人を殺さなかつたのは常盤の色に溺れたのである之が残りに最後に爆發した今一つは佛御前である加賀から出て來て殿の前で舞はせて下さいと云ふに清盛耳に入れぬ伎王の情けでわざ／＼一舞を願ひてやうやく御殿に入れ舞はしめた、それより清盛一變して佛の色に溺れてしまつた、伎王は謂ゆる秋風となり失望して母と妹と三人で嵯峨野

にかくれた其の頃より嵯峨野にかくれた今でも秋の心を表はしてゐるものは小倉山ほどのは少ないだらう。萌え出づるも枯るるも同じ野邊の草いづれか秋にあはではつべき佛もこれを見てはギョツとした其の當時の人心の直ちに感じ易いと云ふ事がわかる、後から來た奴があゝいふ奴だ返報してやらうと奮慨するでもなく之は自分の運命である、之れから佛に仕へて後世を願はんと云ふ様な佛も亦直ちに之れを感じかつては春の野の草であつたのが今は秋の枯草であるが同じ秋に遇ふならば早く世を去りて共にかくれ様と嵯峨野の戸を敲いて佛門に入つたこの細やかな強い情を表はし之が清盛に聯關したが面白い強欲の清盛が之迄は何でもかでも思ひ通りにやりとげた、死ぬ時の病氣迄お誂であつた、上皇でさへも又只一つの目の上の瘤の重盛でも鎧の上に黒染の衣をかければすんだものを流石の清盛も伎王と佛は清盛の意では叶はないもう一度還俗させてつれて來る事は出來なかつた清盛程の人相手は白拍子其の信仰に依りて起つた心は清盛さへもどうする事も出來なかつた、茲に佛教の感化力と個人の信念の力が此所に表はれてゐる意志一方の人だがそれでも所謂無情の念を持つてゐたと云ふ事が現はれてゐる、之につきまといつた人は文覺上人であるこの坊主も清盛の様にあらくれ男で大きな着物をきて長い刀をさした武士であつた自分の從妹に戀した、夫があつても何でもかまはない自分の意志を通さねばならなかつた女を殺して迄も自分の

意志を貫通したそれが他の時代の人物ならば女を殺したら高飛びでもして行く處だが文覺は終に發心入道した之が文覺の文覺たる所であるその時代の質實な所が現はれてをるこの出家入道する事はこの時代一般の情緒と同様である文覺のやり方は面白い百日間那智で苦行した團十郎の得意の場で瀧苦行をしてゐるのが早變りで不動となつて現はれる又その苦行のやりかたが實に文覺式である、今度は高雄山の建立を思ひたち一度やらうとしたらやまない上皇の所に行きたるが管絃樂の最中だといつて玄關拂ひされたところが、この一大事を思ひたつ文覺を寄せないと云ふのは以ての外だと庭にまはつて高雄山建立の勸進帳を高聲に讀んだ武士が捕へんとしたが阿修羅の如くあばれた、夫れだけでは清盛に關係はないがそこで平家顛覆を思ひ立ち東に下り頼朝をおだてたそのおだて方が又文覺的であつた、何處からか鬪體を持つて來て頼朝の眼前につきつけて之は父親の鬪體である美濃國から掘り出したこの亡魂を吊ふのは今が時であると勧めた鬪體の功よりも文覺の勧め方だ文覺の人物を見るには之が適當である平家の世盛りににも追々衰微の業が見えてきたその勢力の強かつのは重盛が父を諫めたゝめであるこの重盛が熱病で死んで面白くない青い顔をして肺病か何かで入道が生きてゐる内に世をはかなみて遂に失望して寂滅往生したそれでも平家一門は氣がつかず得意になつてゐたその間に文覺が東から雷雨を起したのである之を音樂に喩へれば清盛が主な調子になつてゐる所の強いビオラの全體の合唱後の方から悲しい笛の音之

は重盛で文覺はセロの強い低い音がウツウツと唸つてゐるそれが遂に爆發したのである。

今一人の建禮門院である入内して皇子を産み國母となりそのときの快樂は恰も天上世界のものであつた雲に包まれ花につゝまれ天人に圍まれてゐた都を忽につゝまるゝや平家一門西海に遁れ海に流浪するに飲まんとするに水なく到る所に戰その喚きの内に寢起きして鳥のたつを見て敵かと疑ひ白鷺のたつを見ても敵の旗かとおもひ遂に壇之浦に破れ主上即ち最愛の一子も死し自分も溺れたのに遂に東夷に助けられて惜しからぬ命を永らへ阿修羅の巻を通つてきたが考へて見ればみな他の人も六導輪廻をしてきたのであるしからば人道は何によりて之を脱するか即ち阿彌陀を信する外はないそこで先帝を吊ふため髪をゝろして大原に隠れ餘生三十餘年を念佛三昧に送つたその點を平家物語の作者は概括的に味はゝしめてある、はじめは祇園精舎の鐘の音にはじまり建禮門院の六道輪廻に終る建禮門院の運命は自らしたるものではなく一門と共に起り共に破れ共に遁れてたゞ生き残つて宗教の慰安に依り將來の望を以て一生を終つた、かくて六樂のセロも止み悲しい重盛のイングリッシュエホトンも鳴り止み總べて止んだかくて平家物語の大いなるオーゲストラは止んだ平家の興亡をオーゲストラにする音楽家があるならばその雄大で悲痛の情はベートーベンの曲にも比すべきがかくの如く驚き悲しみの中にかくの如き慰安を得て行く事はいつの時代にもある之は言葉でなくてオーゲストラにしくんだならば日本人のみならず外國迄も平家の情

緒に感動せしめ共鳴せしめるものである若し此の中に之を仕組む音楽家があるならば私は死んでからでも聞きにくるでしやう。

英國に於ける戦時病院の状況

日本赤十字社遣英救護班長

鈴木 二郎 氏

私は極めて訥辯で今日皆様に御興味を興へる事は難しい上に材料を充分に整へる事が出来なかつたけれどもお頼みにより断片的な御話を申し上げます。

私は不肖者にもかゝらず一昨年畏くも命を奉じて廿三名の看護婦と一名の委員及二名の職員と共に米國を通過して同年暮に英國に着きました、多數の婦人が歐州に出るのは空前の事であるのと其の任務が傷病兵の看護にあるとの爲に處々に於て大なる歓迎を受けました、ミスポートマンはニューヨークに於て赤十字社幹部の婦人を歓迎する爲に約一時間の演説をされました、(此人はかつてワシントンに於て外務次官をして居られた)その時に日本は赤十字事業の上に於て世界の先輩者であり其上模範とすべきものであります、特に此際の事については感謝の至であるといふ意味を話されました、又ミスドマーは日本に來た時に青島捕虜の待遇が如何によろしきを

見て歸米の後厚い書物を書きまして我赤十字社を世界に紹介しました、是等外人の力によりまして充分の面目を施しましたのであります、英に参りましては婦人がはるばる海をこえて傷病兵救務につとめるといふ事は誠に感謝に堪へぬとよろこびました、つきましてからは直にロンドンに参りまして一週間程は歓待をうけつづけました其の重なるものは赤十字社長である英國皇太后陛下アレキサンドラに歡待せられた事と外務省よりは次官(大臣不在の爲め)が招待の席上に於て私にかつて日本に滞在して居た事がありますので日本の國民性をよく知つて居ります、そして其同盟國の日本から赤十字社の一行を迎へた事は誠にうれしい次第でありますと紹介せられました、ついで婦人紳士のもてなしを受けた事などであります。

其の後私等一行はメトリーの一病院でその事業に従事いたして居りました、英國の傷病兵が同日如何に多いか又當時英國が幾何の兵をかつて居たかは兵學家ならぬ私は存じませぬが話によれば三百萬人に近き兵が働いて居つたといふ事であり、昨年十二月九日の國會での演説によりますと此中五十二萬許は傷病兵になつたので英本土に於ては目のまわる程多忙でありました、抑々英國は海軍を以て有名でありますが陸軍の設備は不充分でありますので平素の設備に大なる缺陷を生じて傷病者を救ふ事に少からぬ不便を感じました、即ち英國は赤十字社設立後まだ十數年の經驗しかもちませんしかし一千年餘の歴史をもつて居るオーダーオブセントジョンといふ赤十字